

インドネシア国家防災庁・気象気候地球物理庁の合同調査団が東北大学災害科学国際研究所を訪問されました (2023/10/31-2023/11/1)

テーマ：東日本大震災、災害研紹介、被災地巡検、震災復興、仙台市荒浜地区、名取市閑上地区、南三陸町
会場：東北大学災害科学国際研究所（仙台市青葉区）、被災地視察（石巻市、南三陸町）

2023年10月31日からインドネシア国家防災庁・気象気候地球物理庁合同調査団が当研究所を訪問されました。今回の訪問は、世界銀行のインドネシア政府に対する防災支援プロジェクトの一環で、日本の防災システムの視察を目的としています。31日は当研究所副所長の小野裕一教授（2030 国際防災アジェンダ推進オフィス）と越村俊一教授（災害ジオインフォマティクス研究分野）を中心にスハルヤント国家防災庁長官と調査団一行十数名を迎え、小野教授からまず当研究所の成り立ちや理念、活動について紹介しました。続いて越村教授から東日本大震災後に改良した津波早期警戒システムについて紹介し、越村教授の取り組みである「リアルタイム津波浸水被害予測システム」について説明しました。加えて、国家防災庁から越村教授の研究室に留学中の学生が発表を行いました。その後、マス・エリック准教授とアドリアノ・ブルーノ准教授（災害ジオインフォマティクス研究分野）が被災地巡検で仙台市、名取市、南三陸町を案内しました。

翌11月1日には、気象気候地球物理庁のカルナワティ長官一行を小野教授が所長室でお迎えし、昨年来の再会を喜びあいながら歓談しました。昼食も交えながら懇談は2時間にも及び、長官からは、博士号取得者目標数 500 人の計画に基づいて東北大学でもさらに受け入れをお願いしたいとの要望がありました。当研究所兼任教授の山崎剛教授（気象・海洋・宙空災害研究分野）からは、今後も優秀な留学生受け入れを前向きに検討すると話しました。中鉢奈津子准教授（URA・広報室）は、2階で開催中の「関東大震災特別企画展」をご案内しながら 100 年前の日本の大災害について説明し、活発な質疑応答がなされました。その後、越村教授から「リアルタイム津波浸水被害予測システム」の開発と運用について紹介しました。東北大学サイバーサイエンスセンターも訪問し、滝沢寛之副センター長がスーパーコンピュータの運用について説明されました。

インドネシアは、日本と同様に災害大国として知られています。当研究所とインドネシア政府の防災関連機関が、学生の受け入れや共同研究プロジェクト遂行によって、災害リスクを軽減していくことが重要です。今回の調査団来訪は、インドネシア政府で中心的に防災を担う2つの省庁の長官の訪問という異例なものでしたが、世界防災を旗頭とする災害研としては世界の期待に答えていく使命があります。我々が想像している以上に世界からの期待が大きいことを肝に銘じていきたいと思えます。最後に両長官に対して、2025年3月に予定している「世界防災フォーラム」での再会を約して来訪受け入れを無事に終わりました。



スハルヤント国家防災庁長官との記念撮影
左から越村副所長、小野副所長、長官、今村教授



10月31日の調査団一行と全員で記念撮影



展示の説明をする様子
左：カルナワティ長官 右：中鉢准教授



サイバーサイエンスセンターにて